

プロジェクトとしての附属幼稚園での英語活動の実践

寺尾 裕子 鈴木 正敏 高橋 美由紀 名須川 知子
(兵庫教育大学)
谷石 宏子
(兵庫教育大学附属幼稚園)

学校教育学研究 第19巻 抜刷 2007年12月

兵庫教育大学 学校教育研究センター

Reprinted from the Journal of School Education, vol. 19, 2007

Center for School Education Research

Hyogo University of Teacher Education

プロジェクトとしての附属幼稚園での英語活動の実践

寺尾 裕子 鈴木 正敏 高橋 美由紀 名須川 知子
(兵庫教育大学)
谷石 宏子
(兵庫教育大学附属幼稚園)

学校教育研究センター・学校問題解決部門では平成17年度からのプロジェクト研究課題を「学校におけるコミュニケーション能力の向上に関する総合的研究」と決め、そのもとでの3つのプロジェクトの一つとして「幼稚園・小学校英語教育に関する研究」を立ち上げた。一年目の平成17年度は「附属幼稚園での英語活動」実践とその研究である。

平成17年度附属幼稚園において一回20分、全五回の英語活動と12月の特別活動30分を実践することができた。活動実践中の観察、事後研究会での振り返りなどによって以下のことが明らかになった。(1)英語の歌を中心とする英語活動は保育内容としてうまく機能した。(2)園外で個別に英語を学習している子どももそうでない子どもも同様に英語活動に参加することができた。(3)クラスの中のよりよく分かる子の助けにより園児に新しい学びが起こった。(4)予期していなかったが、園児の英語の文字への関心の芽生えと学びがあった。

今後の課題は(1)多文化教育の視点を持ち、年間を通じての活動の目標設定の可能性を探ること(2)幼小連携の視点からの英語活動にまで研究の範囲を広げることである。

キーワード：幼稚園英語活動, 英語の歌, TPR, 保育内容, 集団の中での学び

寺尾 裕子：兵庫教育大学・社会・言語教育学系・准教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

鈴木 正敏：兵庫教育大学・基礎教育学系・准教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

高橋美由紀：愛知教育大学・教授，〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1, E-mail: miyukit@aeccc.aich-edu.ac.jp

名須川知子：兵庫教育大学・基礎教育学系・教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp

谷石 宏子：兵庫教育大学附属幼稚園教諭，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4, E-mail: taniishi@school.hyogo-u.ac.jp

English Activity as a Project at the Kindergarten of Hyogo University of Teacher Education

Yuko Terao, Masatoshi Suzuki, Miyuki Takahashi, and Tomoko Nasukawa

(Hyogo University of Teacher Education)

Hiroko Taniishi

(Kindergarten of Hyogo University of Teacher Education)

During the academic year of 2005, we, the member of the project, gave 20 minutes 'English lesson to the five-years' old kids at the Kindergarten of Hyogo University of Teacher Education. It amounted to five times. In addition to these, we had a special activity in December.

Through classroom observation of the five instructional activities and by subsequent reflection time within the same day, the following educational findings have been determined: 1. English activity through English songs functioned well as a content of child care, 2. All the children could participate in each English activity without regard to previous experience of learning English, 3. All the children participated in the activity collaboratively and learned English as a result, and 4. All the children did have an interest in alphabets and began learning some of them without any prodding by the instructors.

The future English activity at the Kindergarten needs to have a perspective of multi-cultural education and provide for an aim as a content of care for kids through a year. Furthermore, it needs to be planned in relation to the one conducted at the Elementary School of Hyogo University of Teacher Education.

Key Words: English activity at Kindergarten, English songs, TPR (Total Physical Response),
content of child care, learning among peer community

Yuko Terao: Associate Professor, Social Science and Language Teaching, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

Masatoshi Suzuki: Associate Professor, Foundations of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, Email: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

Miyuki Takahashi: Associate Professor, Social Science and Language Teaching, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: miyukit@hyogo-u.ac.jp

Tomoko Nasukawa: Professor, Foundations of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp

Hiroko Taniishi: Teacher, Kindergarten of Hyogo University of Teacher Education, 2013-4 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: taniishi@shcool.hyogo-u.ac.jp

1. はじめに

兵庫教育大学附属小学校では平成14年度の試行に続き、平成15年度から毎週1時間の英語活動が実施されて来ている。附属幼稚園においても保護者から園児が幼稚園において英語に触れる機会を望む声が上がってきた。それを受けて、平成17年度に学校教育研究センターのプロジェクトの一部として大学教員と幼稚園教諭が協力し、園児への英語活動の実施を計画実践した。

本稿においては、第1章、第2章と第6章を寺尾が担当した。第3章は高橋が、第4章は、名須川が担当した。第5章は谷石と鈴木が担当した。

第2章において「本プロジェクトの概要」が述べられる。さらに、「実践された附属幼稚園での英語活動と事後研究会の概略および寺尾の視点からの振り返り」が述べられる。第3章では高橋による「英語活動の指導事例と授業後の振り返り」が述べられる。第4章では名須川による「幼児期における英語の意味」が述べられる。第5章では谷石による「園児にとっての英語活動」、鈴木による「附属幼稚園における英語活動の振り返り」が述べられる。第6章では、寺尾による「今後の課題」等が述べられる。
(寺尾 裕子)

2. プロジェクトとしての幼稚園での英語活動

2.1 プロジェクト発足の背景とプロジェクトの目的

兵庫教育大学学校教育研究センターでは平成14年度から16年度の3年間に渡って寺尾、鈴木らは「小学校における英語活動」の研究を進めてきた。そこでは、理論研究、児童と保護者の英語活動に対する意識調査研究、先行する韓国での児童に対する英語教育についての研究を進めた上で、児童が用いることのできるCD-ROM英語教材を作成することができた。

附属小学校での英語活動が定着しつつある現状の中、附属幼稚園の保護者から幼稚園でも英語に触れる機会を望む声が上がってきた。学校教育研究センター・学校問題解決研究部門では平成17年度からのプロジェクト研究課題を「学校におけるコミュニケーション能力の向上に関する総合的研究」と決め、そのもとでの3つのプロジェクトの一つとして「幼稚園・小学校英語教育に関する研究」を立ち上げた。1年目の平成17年度は「幼稚園での英語活動」実践とその研究である。

プロジェクトの目的は、「5歳児が英語の歌を用いた自然な遊びの中で、日常使用言語である日本語とは異なる英語のリズム・響きをどのように体得するか、そして新しい言語感覚の芽生えを培うことができるのか」を検証し、幼児期にふさわしい英語との出会いの方法を提案することである。

2.2 英語活動の流れ

2.2.1 プロジェクト会議

附属幼稚園での英語活動を実践するに当たって、平成17年7月21日木曜日(15時～16時)に、名須川知子附属幼稚園長、高橋美由紀実技教育研究指導センター教員、谷石宏子附属幼稚園教諭(5歳児すみれ組担当)、山田有紀子附属幼稚園教諭(5歳児わかば組)以上4名の学校教育研究センター研究協力教員および、学校教育研究センター教員の寺尾裕子、鈴木正敏の計6名が参加して第一回の会議をもった。自己紹介、プロジェクト研究の経緯の報告の後、高橋からの幼稚園レベルでの園児と英語との関わりについての情報提供を受け、種々意見交換の後にプロジェクトとして、次の4項目が決まった。(1) 研究題目は「幼児期にふさわしい英語との出会いについての研究」とする。(2) 研究員は上記の6名とする。(3) 幼稚園の5歳児を対象とするが、園全体で共通理解をして進める。(4) 研究のまとめ役は寺尾が当たる。

2.2.2 事前保育観察

平成17年9月14日水曜日(9時～9時30分)に、寺尾と高橋は幼稚園を訪問し、5歳児の保育の状況を観察した。5歳児はどれくらいの長さなら大人の話を中心して聞いていることが出来るのだろうかという疑問の答えを見いだすためと、実際の5歳児の活動状況を自らの目で確かめるためであった。観察の結果、20分程度なら話を聞いてもらえるだろうという結論を出した。テレビ視聴の場合、15分程度が人が集中して視聴できる単位とされる場合があることも参考となった。

具体的な英語活動等については寺尾と高橋が話し合い、次のように進めることとした。(a) 英語の歌を用いて園児に活動をさせる。(b) 活動の時間は1回につき20分。(c) 指導案は高橋が作成し、必要があれば他の教員の意見を得て訂正、加筆することがある。(d) 授業者は高橋がメインで行う。(e) 教材は高橋が作成。適宜他の教員が補助をする。(f) 谷石、山田はピアノで歌の伴奏をする。また、園児とともに活動に参加する。(g) 活動後、事後研究会を開催し、全員で振り返り、気づき、観察等に基づく研究を行う。

2.2.3 英語活動と事後研究会

附属幼稚園での英語活動を行った当日に毎回事後研究会を持ち、当日の活動の振り返りを行った。英語活動自体をすることだけが目的ではなく、幼稚園児が英語活動にどのように関わっているかを話し合い、園児の学びの可能性を見いだしていこうとしていたのであった。以下に、毎回の英語活動と事後研究会について、および寺尾の「気づき」を述べる。

第1回 英語活動(すみれ組・わかば組)

日 時：平成17年9月20日(月) 10時20分～11時00分
場 所：各保育室

使用した歌は、次の通り。"Hello Song" (arranged by Takahashi), "Open Shut Them", "Seven Steps" 導入した英語の語、文は次の通り。"What color is this?" Red, yellow, green, など。

英語の歌は高橋が自ら歌い導入を行った。"Hello Song" の歌詞は、挨拶ということで掛け合いになっているので、寺尾も歌を歌って参加することになり、最初戸惑いがあった。

第1回事後研究会

日時：平成17年9月20日（月） 16時30分～17時30分
場所：附属幼稚園

出席者：寺尾・高橋・名須川・谷石・山田（敬称略）

英語活動についての気づき、観察して分かったことなどを順次発表して意見交換をした。そこで、「園児は楽しんで活動に参加していたこと、活動を嫌がったり活動から取り残されたような園児はいなかった」等の共通の理解が得られた。

第2回英語活動（すみれ組・わかば組）

日時：平成17年10月18日（火） 10時20分～11時00分
場所：各保育室

新しい活動は、"Stand up!", "What's your name?", "My name is ?." どちらも、歌を歌いながらの活動である。すみれ組では園児が自分の名前がローマ字で表記されている名札を谷石教諭のところに取りにいく活動になり、全員が終わるまで同じ歌が歌われることとなった。

10月31日がハロウィーンということで、高橋は魔女の衣装を身につけて登場。寺尾も高橋が用意してくれた魔女の帽子をかぶり参加。このことは園児に活動への参加をより興味深いものにしたようであった。活動後、すみれ組の園児が握手を求めてきたが、大変うれしく感じた。"What's your name?" "My name is ○○." の活動では、高橋の対話の相手となり、教授者として活動に参加。前回に比べ、寺尾の活動への具体的参加度が増加した。この回以降サブの教授者として活動に参加することとなった。

第2回事後研究会

日時：平成17年10月18日（火） 16時30分～17時30分
場所：附属幼稚園

出席者：寺尾・高橋・鈴木・名須川・谷石・山田

「すみれ組では偶然ではあったが、ローマ字で自分の名前が書かれた名札を先生から貰ってかけるために、"My name is ○○." と園児が言わなければならない状況が出来たことで、真のコミュニケーションが出来たのは良かった」と皆の意見が一致した。

第3回英語活動（わかば組・すみれ組）

日時：平成17年11月28日（月） 10時30分～11時10分
場所：各保育室

新しい活動は "Listen, listen, what is this sound?"

Animal talkの歌。To market, to marketの歌。今回はわかば組から活動を行った。最初 "Stand up!" "Sit down!" が分からない園児がいた。これは、前回にこのクラスでは十分に練習をやっていなかったからである。また、予定の活動を二つとも実践しようとしたため園児が理解出来ないまま進んでしまった部分があった。グループが順番に教授者で行う活動を取り入れたため、待っている園児の中には日本語で話をしている子どもがいた。英語活動としては問題ありと判断をし、次のすみれ組での活動に教室を移動する短い時間の中で、寺尾と高橋は打ち合わせをして活動内容の組み立てを変更した。このうち合わせ自体、園児に聞かれる可能性があるので英語で行った。すみれ組では、動物の名前と鳴き声を中心に活動を行い、買い物をする活動は行わなかった。動物の英語での鳴き声は寺尾が発音して導入を行った。

第3回事後研究会

日時：平成17年11月28日（月） 15時00分～16時30分
場所：附属幼稚園

出席者：寺尾・高橋・鈴木・名須川・谷石・山田・寺倉

「鳴き声の日本語と英語の比較は園児にとって難しかったようだ」、「鳴き声と動物の名前を園児が混同していた」、「乳幼児は、これは何から始めるので、物の名前から始めるのが良い」という意見が述べられた。次回はまず動物の名前から十分時間をかけてもう一度行うことにした。20分の活動ではよくばらずに丁寧に時間をかけることも必要であるし、歌の難しさにもよるが一度に複数の歌を導入するには慎重になるべきことが分かった。

全員での振り返りの後、附属小学校英語活動に長く関わってきている寺倉教諭に小学校での英語活動についての報告をしてもらった。

第4回英語活動

日時：平成17年12月20日（火） 10時00分～10時30分
場所：遊戯室

特別活動として、附属幼稚園の3歳児、4歳児、5歳児全員にクリスマスソングを英語で歌う活動および一部既習の歌を用いた活動を行った。当日使用するクリスマスソングはCDに録音して幼稚園での保育の時間に適宜利用して貰えるようにしてあった。当日、園児たちは英語の歌詞をよく覚えており、教授者としては驚きであった。1月17日の事後研究会において確認したところによると11月28日以降12月22日までの間朝の時間とお弁当の時間にCDでクリスマスソングを園児に聞かせていたとのことであった。

一部の活動は5歳児にとっては既習の歌でありどのように体を動かすか知っているものであってできて当然とも言えるが、4歳児、3歳児も見よう見まねで一緒になって参加してくれていた。この回は特別活動ということで事後研究会は行っていない。

第5回英語活動（わかば組・すみれ組）

日時：平成18年1月17日（火） 10時30分～11時10分

場所：各保育室

実践された活動は、Animal talkの歌。動物の名前。

Where is the dog? "Head, shoulders,,,"

高橋の事前の指導案に基づく活動内容は、作成依頼をしてあった教材が予定通りには届けられなかったことから急きょ変更となった。そのため5種類の動物（犬・ねこ・あひる・かえる・さる）の絵を幼稚園で準備してもらった大きなフラフープの中に置いて、たとえば、"Where is the dog?"と聞いて、その絵を見つけて手で触るという活動を行った。園児全員が一度に絵にタッチする活動では危険も感じられたので（boys, girlsという語は未導入であったが）、すぐさま男女別、または数人ずつのグループ活動に変更した。第3回同様、教授者としては実際に活動を行いながら適切な方法を探る柔軟に対応する能力が求められることが判明した。"Head, shoulders,,,"の歌は今回初めて導入したが、既に知っている園児もいてスムーズに導入できた。

第5回事後研究会

日時：平成18年1月17日（火） 17時00分～18時00分

場所：附属幼稚園

出席者：寺尾・高橋・名須川・谷石・山田

事後研究会においては、12月の特別活動についての振り返りも合わせて行った。幼稚園の教諭からは「園児が縄跳びをしながら、one, two, threeと歌っていることがある」、「園児がいろいろなものについて英語で何と云うのだろうと疑問を持つようになってきている」という園児の変化についての気づきを聞くことができた。この回に、「園児の態度の変化などについての質問紙によるアンケート調査」を保護者対象に行うことを決定した。また、幼稚園教諭にたいするインタビュー調査を依頼し、快諾を得た。

第6回英語活動（すみれ組・わかば組）

日時：平成18年2月21日（火） 10時00分～11時10分

場所：各保育室

実践された活動は、動物の名前などの復習、絵本を教材として動詞とそれの表す動作である。すみれ組では、動物の名前の復習の後、たとえば、Where is the cat?と聞かせて、園児に床に置いてあるねこの絵を取りに行かせた。高橋が準備したBig Bookの絵本を用いて、動詞を使った表現を聞かせそれが表す動作を高橋の実演をまねて園児が行った。たとえば、The little bopper is swinging.では皆が自分の体を揺らしたのである。日本語での訳は全く与えていない。使用したBoppersの歌は、「10人のインディアン」のメロディーを用いた、歌詞の異なるものである。最後はGood byeの歌でお別れをした。

すみれ組での活動から床の上に置かれた絵を取りにい

く活動では危険も伴うことが分かったので、わかば組では、英語での質問を聞いた後、ボードに貼った絵及び、寺尾が手に持っている絵の中から探して園児に指差ししてもらった活動に変更した。絵本を用いた活動ではすみれ組よりは時間をかけて動詞とそれが表す動作を導入した。10の動詞を一度に扱うため活動中何をしたら良いか分からない園児がいると困ると判断したからである。Boppersの歌とGood byeの歌はすみれ組と同様。

第6回事後研究会

日時：平成18年2月21日（火） 17時00分～18時00分

場所：附属幼稚園

出席者：寺尾・高橋・名須川・谷石・山田

わかば組で、体を動かす活動に参加していない園児がいたが、先生に伺ったところによると体調が良くなかった子と、それに同調した子とのことだった。原因が判明し教授者としては安堵した。すみれ組でもわかば組でも英語活動のある前日は園児が楽しみにしているとのことであった。英語活動を始めて六か月の間に「Stand up! に対して、立つんだよ!と言わなくても、動作ができるようになった」、「動物の名前だけでなく、It's a cat.のように答えて言える園児がいる」ということが報告された。今回の絵本は教材としての評価が高いことで意見が一致した。

2.3 英語活動に関連する調査研究

プロジェクト研究として、幼稚園での英語活動の影響による園児の変化および幼稚園教諭の立場からの園児と自らの変化について気づきを調べることにした。

そこで、保護者に対する質問紙を用いたアンケート調査を平成18年2月27日（月）から3月3日（金）にかけて、すみれ組・わかば組の保護者46名を対象に実施した。結果33名の母親から回答を得ることができた。

幼稚園教諭へのインタビュー調査は、3月20日（月）と29日（水）に、半構造化インタビュー方式で寺尾が実施した。それぞれの調査結果および分析結果の詳細については別に発表の予定である。

2.4 活動全体を振り返って

筆者自身は過去において6年ほど英語教育機関での英語・英会話教授の経験がある。その時の学習者は中学生から高校生、大学生、そして社会人であった。個人教授のレベルでは、小学生に対して口頭コミュニケーションとしての英語を教えた経験はあるが、5歳児に対する英語の教授は初めての経験であった。外国語教育学の専門家として成人の学習者の問題を研究中であるが、たとえば対象学習者の年齢が異なっても、英語と園児の関わりに大変興味があった。7月21日に開催した会議において、早期英語教育の視点ではなくて、あくまで自然な遊

びとしての英語活動の中で英語を体験してほしいものだと他の研究員同様考えていた。英語活動をきっかけとして園児が英語に興味を持てるようになれば良いが、英語嫌いになってはいけないという意見を今も持っている。

5歳児のための英語活動では、5歳児にふさわしいコンテンツ、教授法が必要であることは言うまでもない。高橋から小学校での英語教育の実践・研究を踏まえて、歌を中心とし、TPRもとりにれた英語活動の指導案を作成することの提案があった。日本語教育の現場でも歌を教材として日本語が学習される場合がある。授業以外の時間にも日本語の歌の好きな学習者は日本語の歌を通して楽しく日本語を学んだと報告してくれる。幼稚園では保育に歌が用いられることは自然であるため、5歳児は歌を通して抵抗なく英語と接することができるかと判断できた。

六か月の実践を通して、実際に園児と接してみて英語の歌は園児に受け入れられたことが分かった。活動当日だけではなく、幼稚園において保育の中で何度も繰り返し歌われたことも判明した。保護者へのアンケート調査の結果からも家庭で英語の歌を歌っている子どもが33名中26名いることが判明した。これは、「お子さまは家庭で英語の歌を歌うことがありますか」と保護者に尋ねた結果であるから保護者の知らないところで英語の歌を歌っている子どもがいる可能性もある。

今回の英語活動は早期英語教育の時点からの実践ではないし、音声、リズムなどに重きをおいて活動を計画しており、文字を教授するという考えは全く持っていなかった。しかしながら、寺尾、高橋にとって目の前にいる園児の名前が分かることは必要であったので、前もってローマ字で書かれた名札を作成してもらい園児に首から下げてもらっていた。名札作成の際にはどのようなつづりにするかを協議し、ヘボン式を基本とし、長母音の表記は母音を重ねる方法をとることとした。名札を導入した10月18日までに、すみれ組では「名札を見せて、これ誰のかなあ?という対話を行った」こと、また、わかば組では「同じローマ字を園児が見つめて発言するなど、文字に対して園児の反応がよかった」という報告を受けていたが、六か月の活動の中で、園児は自分の名札がどれかが分かるようになってきたという幼稚園の先生の報告があった。「分からない子には周りの子が助けている」ということであった。活動を通して、また同じクラスのよりよく分かる子どもの助けによって、新しい学びが起きていることが確認できたと言える。

園児は保育室の中だけで英語と関わるのではなく、園の庭にいる時も、寺尾・高橋を見つけると、"Hello!!"と話しかけてくれた。ある園児は大学の施設内において、たまたま筆者を見つけ、英語での会話を試みてくれた。わずか6回の実践であったが、歌と遊びを通して、それ

も仲間、幼稚園の教諭、専門の大学教員とのインタラクションを通じて学びが始まっていることが実感できた。

(寺尾 裕子)

3. 2005年度の5歳児 英語で遊ぼう! の取り組み

3.1 目的と実践方法

本事業の目的は、「自然な遊びの中で日本語という日常の言語とは異なる英語のリズムや響きを身体で感じ、新しい言語感覚の芽生えを培う。また、新しい言葉にも好奇心をもってかかわり、英語に興味・関心をもつ気持ちを育てる。」とし、園児の日常の保育を通して、英語遊びを行い、英語に慣れ親しむこととした。そのため、英語の「聞く・話す」等のスキル面を重視するのではなく、英語を使った遊び(歌・ゲーム等)を活動の中心として実施した。詳細は、以下の指導内容の通りである。

3.2 具体的な毎時間の取り組みについて

毎時間、授業者が「指導案」を作成し、その内容に沿って、活動に対する園児の反応を見ながら授業を進めた。

平成17年9月14日〈水〉9時15分～10時頃 遊びの様子を観察

3.2.1. 初めて英語遊びを実施

テーマ: Hello! 英語で遊ぼう!

日時: 平成17年9月20日

10時30分～10時50分・10時50分～11時10分

場所: 各保育室

授業者: 高橋美由紀

本時の目的: 英語で挨拶をしてみよう。英語の音に慣れよう。園児の身近な活動から英語を学ぶ。

本時の内容:

時間	内 容	留意点・使用教材等	
3分	Hello!		
7分	Nice to meet you!	ぬいぐるみ	
	Hello Songの歌 Hello, hello, hello, how are you? I'm fine, I'm fine, I'm fine than you.	先生のピアノ/伴奏	
9分	色とアクション(交通教室で習ったこと)を覚える crosswalk(横断歩道) Signals(信号機)(Colors protect us.) Red is Stop! Green is Go!(Look both ways.) Yellow is Wait!(Watch out!)	赤, 黄色, 緑の色紙 (園児のカードとして使用) 信号機の模型	
	a red light(赤信号), a yellow [(英・カナダ) an amber] light(黄信号) a green light(青信号) 色のマジックショー	色を見て, 動作をする。	
	Touch the colorのゲーム Seven steps の歌	ペットボトル3本	
	Open, shut them の歌の一部を抜粋	一緒に歌う	
	1分	See you!	See you

授業を終えて：

- 園児は、コミュニケーションを行うための状況が把握できないので、指導者が尋ねた文をオウム返しに繰り返して真似してしまう。パペットを使用してうまくいかなかった。したがって、指導者は園児に発話を促す活動だけにした方が良かった。
- 園児だけでは発話がうまくできないため、指導者と園児は一緒に発話する。
- 活動は、All Englishで進めたことで、園児達が日本語ではない別のことばの世界を感じさせることができて良かった。これは、異文化理解教育を進める上でも重要なことであった。
- この活動では、英語の歌を中心に行うと、園児の興味・関心は高くなる。
- この活動を通して、以下の語彙が発話ができるようになった。Hello, red, yellow, green, blue, black, white, pink, 1～7の数字。
- 園児は、自分の名前を「英語らしく言いたい！」という気持ちが強かった。
- 色を認識して、色を話す活動に繋げて行く時に、視覚教材だけでなく、実際にペットボトルを振って透明な水の色が、赤、青などの色に変化することをマジックショーとして行ったことは、園児の色についての関心度が高くなり良かった。
- 園児は20分間集中して英語に親しむことができた。
- 英語の歌は、先生の伴奏かアカペラで行ったのでテンポを遅くして園児が歌いやすくなったので良かった。

3.2.2 英語で自分の名前を認識する

テーマ：My name is ～.

日 時：平成17年10月18日

10時30分～10時50分・10時50分～11時10分

場 所：各保育室

授業者：高橋美由紀、寺尾裕子

本時の目標：自分の名前を英語で言おう

本時の内容：

時間配分	内 容	備 考
導入 3分	<Hello Song> Hello, hello, how are you? I'm fine, I'm fine, I'm fine, thank you. <Stand up> Stand up, 1,2,3 Sit down, 1,2,3	先回の復習 椅子に座っている状態から、立つ(1,2,3.足踏み)立った状態から座る(手を叩く)
展開 3分	<What's your name?> A: Hello, hello, what's your name? What's your name? What's your name? Hello, hello, what's your name? B: My name is <u>Miyuki</u> .	寺尾と高橋でデモ
発展	<名前を代える>	

10分	A: Hello, hello, what's your name? What's your name? What's your name? Hello, hello, what's your name? B: My name is Anpan man. My name is Syokupann man. My name is Curry man. My name is Doraemon. My name is Dorami chan.	絵を裏向きで見せる 絵を表に向ける (絵を代えて5回歌いながら行なう) 子供達が知っている絵 アンパンマン、ドラえもんなど
	A: Hello, hello, what's your name? What's your name? What's your name? Hello, hello, what's your name? My name is 園児の名前.	直接園児に尋ね、 園児が答える。
復習 4分	信号の色で What color? Red, yellow, green <Seven Steps> 1,2,3,4,5,6,7. 1,2,3,4,5,6,7. 1,2,3. 1,2,3. 1,2,3,4,5,6,7. <Open shut them> Open shut them, open shut them. Give a little, clap, clap, clap. Open shut them, open shut them. Put them on your lap. (head等に代える) Open shut them, open shut them. Give a little, clap, clap, clap. Open shut them, open shut them. Put them on your lap. (head等に代える)	

授業を終えて：

- 園児にとってinputの量が多いと思われたが、歌を通して活動したために、かれらが負担に感じている様子はなかった。
- 日常生活の保育で日本の歌を習うのと同様に発話に繋げていった。
- 先回学習した歌は、担任が日常の保育で扱っていることから、既にマスターしている園児も多かった。
- 園児達がよく知っているキャラクターを使用して、What's your name? で「人物当てゲーム」を行ったために、彼らの英語に対する興味・関心が高かった。そのため、答えのパートであるMy name is ～. の発話は直ぐに覚えることができた。
- 英語で自分の名前を発話することに対する興味・関心も高かった。
- 英語の歌は園児が楽しく歌えるだけでなく、動作を通して言葉が定着できるように、T.P.R.を使用して歌えるものを選曲した。

3.2.3 第4回目の取り組み

テーマ：知っているよ、その動物

日 時：平成17年11月28日

10時30分～10時50分 10時50分～11時10分

場 所 : 各保育室

授業者 : 高橋美由紀, 寺尾裕子

本時の目的 : 動物の英語の名前を知る。英語の音に慣れよう。鳴き声を通して異文化体験をする。

本時の内容 :

時間	内 容	留意点・使用教材等
3分	Hello! Nice to meet you! What's your name? (復習)	
7分	Listen, listen, what is this sound? で動物の絵を見て, どの鳴き声か当てる。 わかった園児は絵を取る	動物の絵カード 鳴き声
9分	Animal Talkの歌 A cat says mew, mew, A cat says mew, mew I am a cat, I am a cat. To market, to marketの歌 To market, to marketと歌いながら, 4人 ~5人のグループで動物を買いに行く。	鳴き声をまねしよう 自分の名前ではなく, 動物の名前で言ってみる。自分の名前と混乱を避けるために, Myを使用しないで, I amを使用する。 Big, smallの形容詞が導入できれば, 動作から入れる。
1分	See you!の歌	See youのCD

授業を終えて :

- 動物の名前については問題はなかったが, 鳴き声は抽象的であり, 園児にとってイメージすることが困難であった。
- マザーグースのTo market, to marketの歌は園児には曲の馴染みもなかったため, 導入することが困難であった。
- 最初から授業者が多く動物を紹介しすぎて, 園児が動物を選ぶ時間がかかりすぎた。

3.2.4 第6回の取り組み

日 時 : 平成18年2月21日

10時30分~10時50分 10時50分~11時10分

場 所 : 各保育室

授業者 : 高橋美由紀, 寺尾裕子

本時の目的 : 動物の英語名の復習。身体の英語名を知る。

1~10までの数と動作で楽しもう

本時の内容 :

時間	内 容	留意点・使用教材等
3分	Hello! Nice to meet you! Hello song.	
5分	Seven steps song. Point the <u>dog</u> , point the <u>cat</u> , put it on your head. 動物名がわかった園児は, 動物を指し示し, その動物の絵をとってくる活動とした。 人数制限して順番に行った。	動物の絵カード 5種類の動物 (犬, ねこ, あひる, かえる, さる) の絵
11分	Big Bookの絵本と歌で, 1~10までの数と動作を導入する。絵本で数を導入し, さらに動作を真似して10の動作を行なった。その後, One little, two little,	(1~7までは既習である)

	three little boppers, four little, five little, six little boppers, seven little, eight little, nine little boppers, ten little boppers are hopping! (下線部の動作を変えて9回歌う)	「10人のインディアンの曲」 (Big BookとCD)
1分	Good bye, good bye, good bye to you. Good bye, good bye. Oh! see you again!の歌	Good byeの歌 (CD)

授業を終えて :

- 動物の名前を聞いて, その動物の絵を採りに行くゲームとした。園児の反応はとても早く, 一度に絵の所に集まってしまうため, 人数を3~4人として順次行った。
- 園児は, 動物の鳴き声と動物の名前の英語での言い方が理解できた。
- 初めて絵本を使用した英語活動を行ったが, 園児達は日本の絵本の読み聞かせと同様の反応であり, 特別に英語の絵本を意識している様子もなかった。
- 絵本の内容が, 数と動作を示すものであったため, T.P.R. (Total Physical Response) を使用した活動を行った。

3.3 「英語遊び」の効果

「英語遊び」は, 園児が歌や遊びを通して英語を学ぶことを中心にした活動とした。歌やチャンツは, 指導者が園児に文構造や語彙を強化するために使用できる。歌はリズムとメロディーがあるので, 子ども達にとって記憶に残りやすく, インプットやアウトプットが容易にできる。

活動で使用した歌は, リズミカルでフレーズに繰り返しが多いため覚えやすく, 園児が自然に動作と発話を習得することができるものであった。指導者は歌のフレーズ毎に, 言葉と動作を何度も繰り返し, 園児は指導者の言葉を聞きながら, 指導者の動作を真似して歌っていた。また, 歌の活動は, 園児が楽しく踊って, 英語のリズムに慣れることができるだけでなく, T.P.R. (Total Physical Response) = 「聞いて反応する」活動を行うためのものである。園児は, リスニング活動で聞いたセンテンスを, 歌に乗せて動作によって理解することができる。また, 指導者は児童が歌に合わせて表現する活動を観察して, 歌詞の英語を理解しているかどうかを判断することができる。

このような理由から, 「英語遊び」では, 歌を使用した活動を多く採り入れたが, 園児が歌から英語の発話へと繋げることができたので, 効果的であったと思われる。さらに, 「英語遊び」に, 園児らが楽しく参加していたことや, 授業者らに積極的に英語で話しかけてきたことから, この活動の本来の目標は達成できたと思われる。

また, 指導者と「英語遊び」を実施した後, 園児は担任と英語の歌や簡単な英語でのやりとりを日常の保育の

中で実施した。そのため、「英語遊び」は、特別な活動ではなく、「日常保育の一環」として捉えることができ、園児達は学習を意識しないで母語と同様に言葉を習得し、定着させることができた。(高橋美由紀)

4. 幼児期における英語の意味

現在の英語教育の動向として、小学校での英語が次期の学習指導要領で必修になる可能性が高いことがいわれ、にわかに注目を浴びてきた。当然、小学校以前の幼児教育における英語にも関心が寄せられている。昨今のいわゆる幼児のおけいこごとのランキングでは、スイミングを超えて英語塾が大流行でもある。平成12年度あたりからは、幼稚園・小学校等の異校種の連携研究にも研究テーマとして挙げられている。当時は、私立大学付属学校連携事業として、幼稚園から大学までの一貫した英語教育について「国際人を育てる」という名目で、連携教育として掲げる学校もあった。また、この傾向は平成15年度頃からは、小中連携を中心とする研究として、公立学校でも開発研究指定校として「幼・小・中」学校における英語教育の可能性を探る試みがされている。それは、前述したように小学校英語の必修化検討の方向も含めて、非常に熱を帯びて実施されている。現在、小学校の9割近くで総合学習の時間に英語に関する内容を実施していると言われている。

幼児期に英語にふれる目的は、いきなり、小学校ではじめての英語にふれるよりは、「英語は楽しいものだ」という認識を5歳児くらいの幼児期後半でもつことであり、よく「英語に慣れ親しむ」といったことが述べられる。また、言語教育の効果は幼いうちの方があるとか、幼児期から親しむことで、バイリンガルのようなになる、といった幻想を抱く場合もあるらしい。少なくとも、バイリンガルになるには、日常の中で2つの言語をしっかりと使う必要性のあるところでしか育たないことは明らかである。元々、言葉の習得は、幼児の生活実践と結びつけてこそなされるのだからである。

従って、本附属幼稚園で英語の保育内容を開始したのは、そのようなバイリンガルのような夢のような話を真に受けたわけではない。すなわち、幼児にとっての英語は、小学校の準備として英語に慣れ親しむという目的だけではなく、さらなる意味をもっていると考えられる。それは、第一に保育内容としての意義、そして、第二にリズムとしての英語の特性、第三に人権教育、第四に保護者への警告、としての意義である。

まず、保育内容として「英語」を考えると、特に幼児後期にとっては日本語とは別の言語であり、さらに、「英語」という名称をどこかで聞いたことのある未知のものとしての内容である。複数の幼児から、実際に聞いて

た言葉であるが、「大人になったら使える、大学で習うもの」という、大人になるということと自分の未来への夢と重なる「憧れ」のような響きをもつものらしい。幼児期は、自らの心身をフルに活用して、体験してさまざまなことを覚え、身体で獲得する時期である。従って、総合的な活動である「遊び」をとおしてこそ、学びを深めることが可能である。「英語」もひとつの保育内容であり、日本語の絵本を読むことも、英語を使って遊ぶことも、またボール遊びすることも、それぞれの特性はもちろんあるが、結局それらを道具として使うことで学びを深めるのである。

第二に、リズムとしての英語であるが、これは、英語のもつ特性の一つであると言える。それは、よく、英語の歌にあわせて身体を動かしたり、動作をしたり、振り付けで踊ったりするのだが、いずれも英語のアップテンポなリズムに幼児自身の身体がよく合わせられるのである。いわゆる「ノリがいい」状態で英語の歌にあわせて身体を動かすのである。これは、英語自体がもっている言葉のリズムによるものであろう。わが国のわらべうたの時の幼児の身体の動き、声、リズムは日本語に合っているが、アップテンポのフォークダンス系の曲には英語による歌の方が身体の動き、声、リズムは一致してくる。

第三に人権にかかわる問題であるが、世界中には日本語、英語のほかにも数多くの言語が存在する。たまたま、英語は汎用性が非常に高い言語であるが、それぞれの地域にはその土地にふさわしい必要な言葉がある。そのことの第一歩として自分たちの住んでいる地域の日本語があり、他の国の人の言語のひとつである英語が存在するというのである。それをまず、知識ではなく、「他の言葉がある」ということを実感することが英語にふれる大きな目的のひとつとして考えなくてはならないことである。

第四に保護者への警告という意義がある。これは、早いうちから英語の塾通いを抑制することである。保護者の意向としては、語学は楽器と同じく、早いうちにふれさせることでより大きな効果があると期待して、塾へと幼児を駆り立てている。確かにそのようなこともあるだろうが、それは文字を伴う不自然な語学教室であったり、アルファベットを読めることだけで優越感にひたるような、偏った英語教育である場合も実際には存在する。そのような中で、大学の研究として、年齢にふさわしい「英語を楽しむ」「英語って面白そう」といった気持ちをもたせる試みは、かえって幼児期に必要なことと言える。 「幼児に英語なんて必要ない」という前に、英語にふれさせるというのであれば、どのような方法がその後の第二言語に対する意欲へつなげていくことができるのか、というテーマでの吟味がさらに必要になってくるのである。今の英才教育に追いつくのではなく、もっとも

幼児期の可能性をもたせた方法を模索する意義は、保護者への啓蒙としてもあるだろう。

以上、幼児にとっての英語の意義について、述べてきたが、次にこれからの課題について述べよう。まず、今後小学校につなげる英語教育を考える上では、英語教育における幼小連携が欠かせないであろう。そのためには、英語のCDや教材に関して、幼児にふさわしい開発と指導方法を確立する必要があるだろう。そこでは、日本語にはない、英語のもつリズムミカルな躍動性にふれる方法が開発されるべきであろう。それらが幼稚園の教諭が指導できるような体制も研究課題として挙げられよう。

実際に保育の一貫として1回20分程度の「英語で遊ぼう!」の活動であったが、幼児は目を輝かせて全身で楽しさをあらわしている。何が彼らの興味をそそるのであろうか。生き生きと発音する幼児の姿から「英語より日本語の確立の時に、必要なのか」とか「幼児はすぐに忘れるから意味があるのか」「やらせではないか」といった批判を超える保育内容への可能性を感じる。もっと、幼児たちと楽しく意味ある内容を開発していきたいと考える。
(名須川知子)

5. 幼児教育専門家による英語活動の振り返り

5.1 園児にとっての英語活動について

2学期より始まった「英語で遊ぼう」は園児にとって楽しい活動の一つであった。何より、「英語の先生」に出会えることが楽しくて「今日は英語があるの?」と聞き、「あるよ」と答えると「やった!」と心待ちにしている。初めて来られた時「あの先生は何人?」と聞くほど英語しか話されない先生のことが不思議な存在であったようだ。

しかし、英語の教室に通っている園児も数名いることから、先生に教えてもらった「英語の歌や遊び」は「それ知ってる」とすぐに親しみを覚えていた。日頃おとなしい女兒が教えてもらった「セブンスステップ」を「知ってる」と、にこっと笑顔で教師に話しかけていた。また、教えてもらった「ハローソング」を毎日のように歌っていると教師との掛け合いもできるようになり、掛け合いを楽しむ姿が見られた。そして、自分の英語の名札をもらい、それを付けて遊ぶうちに、自分の文字が分かるようになった園児もいる。名札をみんなに見せると「あ、それ僕の」「それは〇〇ちゃんのもの」「僕と一緒にいるなあ」と文字にも関心をもっている様子が見られるようになった。そして、先生が帰られるときには「シーユー」「グッバイ」と自分から声をかける姿もみられ、英語の時間を楽しみにしている様子が伺えた。

このように月一回の「英語で遊ぼう」を楽しみにし、英語に触れることで、家庭より英語の絵本を持ってきて

見せ合ったり、知っている英語を伝え合ったりする園児も出てきた。また、少しでも英語を知ったことから自信もつき、自分から友達に積極的にかかわろうとする姿や、様々な遊びに取り組もうとするなど、普段の遊びにも変化が観られるようになった。

このような園児の変化は家庭でも観られ、「英語のあった日は喜んで話をしてくれる」「今まで歌をあまり歌うことが無かったが幼稚園で教えてもらった英語の歌をよく歌って聴かせてくれる」「一人でもよく英語の歌を口ずさんでいる」などと家庭でも園児の成長を喜ぶ声も聞こえてきた。



また、引っ越しをする友達をみんなで見送った時、自然と幼児の口から「シーユー」と出た時は、側にいた保護者も驚き「幼稚園での英語で遊ぼうの成果が出てきたのかな?」と喜びの声も上がった。

数回の「英語で遊ぼう」であったが園児にとっては楽しい活動のひとつであり、「英語が大好き」「もっと英語を知りたい」と思える活動になったことは今後の「英語教育」につながっていくと思う。
(谷石 宏子)

5.2 附属幼稚園における英語活動を振り返って

附属幼稚園における英語活動では、子どもたちが興味を持って参加する姿が多く見受けられた。特に、歌を歌ったり身体を動かしたりする場面では一人ひとりがしっかりと声を出していたり、思う存分に動きを楽しんでいるようであった。またゲームの場面では、用意されたプロップに興味を持ち、ゲームの内容を理解しながら参加していた。

しかし、子どもたちが言語としての英語を理解していたかどうかは検討の余地がある。積極的に参加していた子どもたちの中には、課外で英語教室などに通っている者もあり、そのような機会のない子どもたちに比べて、参加のあり方が異なっていたように思われる。既に得られた知識を使っているケースばかりとは限らないが、心理的にもスキルのにも、今までに英語のレッスンを受けたかどうかは、子どもたちにとって自信のありようが違

うのであろう。

それでも、担任の努力によって、歌などの定まったパターンでの活動にはほぼ全ての子どもたちが参加できていたように思われる。これは月一回の英語活動の時ばかりでなく、日々の生活の中で子どもたちが英語の歌に触れていたことによるものである。日常場面におけるこうした働きかけによって、英語の歌やカウンティング、あいさつなどが子どもたちの生活の一部となっていたことが、数少ない英語活動の日を楽しみにする姿勢を形作っていたと言える。

全体として、幼稚園段階で英語活動を導入したことは子どもたちの育ちに寄与していると考えられるが、いま一つ考慮すべき点として、多文化理解の側面を加えることであろう。技能としての英語だけではなく、英語を使うということについて、それを使う人々の存在や、英語を使うことによって文化や背景の異なる人々とのコミュニケーションが可能になるということ指導の中に組み込んでいくことが望まれる。そのためには、英語活動を一つの区切られたものと捉えるのではなく、園生活全体の中で一貫した教育方針のもとで行われるべきものと考えられる。今後は、活動後の振り返りだけではなく、年間を通して英語活動で何をねらいとして考えるか、また事前の打ち合わせによって個々の活動レベルで何をねらいとして設定するかを話し合う必要がある。

いずれにせよ、今回の英語活動は、授業者の創意工夫と担任の日々の努力によって子どもたちにとって有意義なものとなったと考えられる。将来的には、小学校との連携を視野に入れつつ、幼稚園での英語活動の意義と方法について、さらなる検討をしていくことが望まれる。

(鈴木 正敏)

6. おわりに

研究員全員の協力と努力により、平成17年度に附属幼稚園において一回20分、全五回の英語活動と12月の特別活動30分を実施することが出来た。また、事後研究会を全五回実施することができた。活動実践中の観察、事後研究会での振り返り等によって以下のことが明らかとなった。

(1) 英語の歌を中心とする英語活動は保育内容としてうまく機能した。(2) 園外で個別に英語を学習している子どももそうでない子どもも同様に英語活動に参加することができた。(3) クラスの中のよりよく分かる子の助けにより園児に新しい学びが起こった。(4) 予期していなかったが、園児の英語の文字への関心の芽生えと学びがあった。

英語は世界の言語の中の一つである。世界中には日本語と異なる言語を母語とし、異なる文化の中で生活して

いる人々が存在する。英語を使用することによって、英語を母語とする人々やそうでない人々とコミュニケーションが可能となる。今後は、そういった視点を明白にした上で園児に対する英語活動に取り組むべきであろう。園児が「自分が使っているのとは異なる言語を話す人々がいるんだ」ということを実感することが、園児が英語と触れあうことの大きな目的の一つに挙げられなければならないということである。そして、年間を通じての英語活動のねらいというものが明示できるのかどうかを考慮して研究を進めていかなければならないだろう。幼小連携という視点での英語活動への取り組みもまた忘れてはならない。園児に対する英語活動についての研究結果から小学校での英語活動に視野を広げることが今後の私たちの研究の可能性の一つとなるだろう。(寺尾 裕子)

参考文献

- 開 隆堂 (2003) Sunshine Kids Book 1 & 2 開隆堂出版
中本幹子 (2002) Tiny Boppers アプリコット
中山兼芳 (2001) 児童英語教育を学ぶ人のために 世界思想社
渡邊時夫 (2003) 英語が使える日本人の育成 三省堂
吉田研作 (2003) 新しい英語教育へのチャレンジ くもん出版

(2006.9.1 受稿, 2006.10.17 受理)